

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03132

研究課題名(和文) 近世南アジアにおける地方史叙述の展開に関する文献学的研究

研究課題名(英文) A philological study of local historiography in the early modern South Asia

研究代表者

真下 裕之(Mashita, Hiroyuki)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70303899

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：南アジアは地理環境や言語文化を異にする複数の地方から成っており、それぞれの地方が経験した歴史も異なっている。本研究課題では、これらの諸地方を統合したムガル帝国(1526-1858)のもとで著されたペルシア語の歴史書の数々において、各地方の歴史がいかに叙述されているかを網羅的に調査し、そのデータを収集・整理した。その特性と類型に関する分析は目下進行中であるが、帝国主導の歴史叙述が、南アジア各地方の過去を帝国の秩序に再編成していったプロセスを解明するための基礎的な資料群を整備することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、歴史叙述の形成と展開を手掛かりとして、帝国の威信を背景にしたペルシア語文化の所産が基軸となって南アジアの近世史を導いた文化史の展開を考察する可能性を示したという学術的意義がある。同時に、従来は社会経済史的な観点からなされることがほとんどだった南アジア近世史の研究に、南アジアにおける知の近世史という新たな視角を導入する可能性を示したという意義もある。文化史や知識史という異なる歴史認識の視角の導入には、多面的な歴史認識を開くという社会的意義も備わっている。

研究成果の概要(英文)：The South Asia is comprised of provinces which have different geographical and linguistic environment. Each of the local societies experienced different histories. The present study exhaustively has surveyed Persian historical writings which was composed under the Mughal Empire (1526-1858), aiming to clarify how history of each of the localities was described in those historical writings. The collected data is now being analyzed to find out characteristics and typology of those historiographies. Our study has built basic corpus for illuminating the historical process in which the Mughal historiography integrated histories of local societies of the early modern South Asia into the imperial system of knowledge.

研究分野：南アジア史

キーワード：南アジア 歴史叙述

1. 研究開始当初の背景

12世紀末以降、北インドに相次いで進出したトルコ系の人々は、新たな政治的秩序とともにイスラームとペルシア語文語文化をももたらした。デリー・スルターン朝からムガル帝国にわたる時代に、この新来の宗教文化と言語文化とが、インド在来の諸宗教および諸言語との間にそれぞれ有した関係の諸相は重要な研究課題である。但しムスリムの政治的覇権が南アジア社会の全面的なイスラーム化をもたらしただけではないし、個人におけるペルシア語の獲得がイスラームの受容を意味したわけではないことを考慮すると、ムスリム諸政権の政治史的展開、イスラーム化の進展、ペルシア語文語文化の普及はそれぞれ別の次元に属する社会変化であったと考えるべきである。かかる認識のもと研究代表者は、これら3つの社会変化の側面をあえて戦略的に区分して研究を進めてきた。すなわちムスリム諸政権の制度史に関連する研究(下記 a, b)、南アジア社会のイスラーム化に関する研究(下記 c, d, e)、南アジアにおけるペルシア語文語文化に関する研究(下記 f, g, h, i)であり、最後者においてはペルシア語による文化的所産の一典型としての歴史叙述の展開に特に注意を払い研究を進めてきた(下記 c, j, k, l)。

一方、これら3つの観点をあらためて総合的に取扱うことで、イスラームとインド在来の諸宗教、ペルシア語文語文化と近代インド諸語との関係の諸相に踏み込む研究も必要であるとの認識から構想されたのが研究業績13であった。これは上記の歴史叙述の研究から派生したもので、ムスリム政権下で編まれたペルシア語のインド通史のなかで、政権登場以前のインド古代史がいかに叙述されたかを探究したものであった。その結果明らかになったのは、このような「ムスリム時代前史」を備えたインド通史が16世紀末以降すなわち南アジア史の近世期に出現したこと、「前史」を構成する要素が、ムスリム社会に普及していた旧約聖書的な民族起源説話のみならず、ムガル帝国のアクバル宮廷でペルシア語に翻訳されていた『マハーバーラタ』やヴィシュヌの転生説話などインド古典のエピックにも由来していたことであった。在来インドの歴史と古典文化の所産はペルシア語に翻訳されて、その通史的歴史叙述の中に再編成されていたのである。

しかしこの研究には重大な未解明の部分が残されていた。上記のようなインド通史の歴史叙述はほぼ例外なく、ムガル帝国の各州の歴史を叙述する複数の「地方史」から構成される集合体であるが、問題はそれらの各「地方史」叙述がしばしば、インド全体の「ムスリム時代前史」とは異なる内容の「前史」を備えていることである(ベンガル地方、マールワール地方、スインド地方など)。ムガル帝国時代までにインドの各地方で近代インド諸語の所産が生みだされていたことを考慮すると、このような各地方の「ムスリム時代前史」を伝えるペルシア語の歴史叙述はそのような各地方の近代インド諸語の所産に起源を有した、ないしは起源を共にした可能性がある(むしろペルシア語文献のほうに起源がある可能性も考慮すべきではある(K. Chatterjee, 'The Persianization of Itihasa', *The Journal of Asian Studies*, 67-2, 2008, pp. 513-543))。すなわちインド全体の「ムスリム時代前史」とは別に、各地方の「ムスリム時代前史」の歴史叙述を、近代インド諸語文献との対照を行ないつつ、網羅的に分析することが必要なのである。

イスラームとインド在来の諸宗教、ペルシア語文語文化とインド諸語との関係の諸相は、歴史学のみならず、比較宗教学、比較文学の観点からも、研究者の注意を集めてきた重要課題である。しかし具体的な史資料に即した実証的な研究が行われるようになってきたのは最近のことである。2010年からF. Speziale(パリ第3大学)を中心に始まった研究プロジェクト Perso-Indicaが欧米及びインドの有力な研究者たちの参加を得て、着実に活動を展開している(<http://www.perso-indica.net/>)。またサンスクリット語だけでなく、近代インド諸語の所産にも目配りして行われた、新たな研究成果の公表も相次いでいる(例えばF. Orsini & S. Sheikh (eds.), *After Timur left: Culture and circulation in fifteenth century North India*, New Delhi, 2014; R. Kinra, *Writing self, writing empire: Chandar Bhan Brahman and the cultural world of the Indo-Persian state secretary*, Oakland, 2015; A. Truschke, *Culture of encounters: Sanskrit at the Mughal court*, New York, 2016)。本研究課題は、これらの最新の研究動向とその成果を考慮に入れて構想されたものである。

a. 真下裕之「ムガル帝国におけるバフシ職について：大バフシ職の運用における人的要因」『東洋史研究』71-3, 2012, pp. 85-130.

b. Hiroyuki Mashita, 'A historiographical study of the so-called *Ahwāl-i Asad Bīg'*, *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 36-1, 2003, pp. 51-103.

c. 真下裕之「インド史」の成り立ちについて：「イスラーム」と南アジアの「在来社会」今松泰・澤井一彰編『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相：在来社会との接触・交流と変容』人間文化研究機構地域研究間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」2015, pp. 1-22.

d. 真下裕之「南アジア史におけるイスラーム化と改宗」千葉大学 COE スタートアッププログラム「邂逅と共生の歴史学：新しい世界史像の構築」研究会「近世世界における「改宗」問題」2011年1月8日、千葉大学文学部

e. 真下裕之「イスラーム化の史実と伝説：南アジア史におけるイスラーム信仰戦士」共生倫理研究会編『共生の人文学：グローバル化時代と多様な文化』神戸大学 2008, pp. 190-214.

- f. 真下裕之「ムガル朝インドの写本と絵画」小杉泰 / 林佳世子編『イスラーム 書物の歴史』名古屋大学出版会 2014, pp. 279-297.
- g. 伊藤隆郎、緒形康、真下裕之、村井恭子『アジア威信言語関係研究文献目録』科学研究費助成事業（萌芽研究）、研究報告書
- h. 真下裕之「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会 2009, pp. 205-231.
- i. Hiroyuki Mashita (ed.), *Royal Asiatic Society Classics of Islam II. The Muslim World 1100-1700: Early sources on Middle East History, Geography and Travel*, London / New York, 2007.
- j. 真下裕之「近世南アジアにおける人的移動の記録と記憶：デカンのムスリム王朝の出自説をめぐって」守川知子編『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会 2016, pp. 33-58.
- k. 真下裕之「17世紀初頭デカン地方のペルシア語史書 *Tadkirat al-Mulūk* について」近藤信彰編『近世イスラーム国家史研究の現在』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2015, pp. 197-232.
- l. Hiroyuki Mashita, 'Iranians in the Early Modern India', Usuki Akira & Omar Farouk Bajunid & Yamagishi Tomoko (eds.), *Population movement in the modern world IV: Population movement beyond the Middle East: Migration, diaspora, and network*, Osaka, 2005, pp. 291-304.

## 2. 研究の目的

本研究課題は、ムガル帝国時代（近世）に著されたペルシア語の地方史叙述にかかる文献資料を主たる調査対象として、各地方におけるムスリム支配時代以前に関する歴史叙述の内容を網羅的に収集、整理、分析し、各々の特性と類型を明らかにすることによって、帝国の威信を背景にした歴史叙述が南アジア各地方の過去を帝国の秩序に再編成していったプロセスを解明することが目的である。さらにそれらの地方史叙述の形成に資した各地方の近代インド諸語文献の意義を包括的に検討するための分析モデルを構築することを念頭に、主要なインド諸語の文献群における歴史叙述を収集することによって、近世南アジアにおける地方史叙述の形成と展開に関する総合的な基礎資料群を得ることも本研究課題の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究課題では、16世紀末から18世紀に研究対象の時期を設定し、ペルシア語の歴史文献に見える地方史叙述を網羅的に検討するとともに、その知見を近代インド諸語文献の所伝と対照させる。根拠資料となる文献群は、については従来の研究によって蓄積された材料を一部用いつつ、研究の観点に即して新たに整備するが、については所要資料の多くを新たに整備する。また、のいずれについても未公開の手写本として伝存している資料については、実地調査を行って所要の情報を収集するとともに、必要なものについては複写を入手する。以上のように整備した研究資料を整理・分析することによって、近世南アジアにおける地方史叙述の形成と展開に関する総合的な基礎資料群を得る。

（平成29年度）

本研究課題では、16世紀末から18世紀に研究対象の時期を限定する。これはインド史の通史的叙述という歴史書のスタイルが出現したのが16世紀末であること、ペルシア語が歴史書の著述言語として相当数の著作で用いられ、近代インド諸語の著作群と有意の対照を可能にするだけのサンプル数が得られるのは18世紀までに限られると見込まれることによる。

本年度においてはまず、ペルシア語の歴史文献を根拠資料として、各地方史に関する歴史叙述を整理する。調査対象は、インド通史の一部を構成するものから、単体として著作された地方歴史書に至るまで、網羅的にカバーすることとする。公刊済みの資料についてはこれを購入して所属機関に備える[設備備品費]。根拠資料となる文献群の一部は、従来の研究活動によって研究代表者のもとに整備されており、内容の整理・分析もある程度行っているため、これらのデータをもとに、今後新たに収集されるデータを整理・分析する指標を予備的に設定する。一方、近代インド諸語文献については初動の参考資料となるべきカタログ、参考書誌を整備する。さらにそれらから得られる知見をもとに、研究に資する個別の一次文献群を整備する[設備備品費]。整備すべき文献群は第一義的には歴史文献だが、歴史に取材した文学やエピックの類も対象に加える。

以上の一次史料群に加え、最新の研究動向をフォローするため、研究課題に直接、間接に関連する二次文献も併せて整備する。整備すべき二次文献には、オンライン上の電子ジャーナルや電子データベースのコンテンツも含まれる[設備備品費、その他]。また必要に応じて、紙媒体の文献を高速フラットヘッドスキャナによってスキャンして、ハードディスクに蓄積し、必要に応じて画像処理とファイル形式の変換を施しつつ整理して、研究資料としての利便性の高い形式で利用する[消耗品費]。大量の画像ファイルは、謝金を用いて処理・変換・整理を行わせる[謝金]。

さらに、参照すべき未公開の資料については、実地調査を行う一方、必要に応じて、マイクロフィルム等の複写をオフサイトで購入する[外国旅費、その他]。調査先として本年度は大英図書館

館を予定している。これらの研究機関に、本研究課題に関連する未公開の資料が所蔵されていることは、研究代表者の従来の研究によって判明しているうえ、在外研究の経験ゆえ（とくに神戸大学若手教員長期海外派遣制度（科研費以外の研究費1.））同地の研究機関の実情には精通しているため、効果的に本研究に関する調査を進められる見込みである。購入したマイクロフィルムはデジタルスキャンによって電算化し、研究に供する〔その他〕。また所属先に整備できない資料を調査するため、東洋文庫（東京）に赴く必要が見込まれる〔国内旅費〕。

以上のごとく、本年度はおもにペルシア語文献群を中心として、現有の研究資料と新たに整備する研究資料を解読・整理・分析して、地方史の歴史叙述を構成する要素の情報を採集し、予備的に設定した整理・分析指標に基づいて設計したカード型データベースに情報を蓄積していく〔消耗品費〕。

（平成30年度以降）

前年度に得た知見とデータをもとに、各々の文献資料の解読・整理・分析をさらに進める。これにより情報を蓄積することと並行して、予備的に設定したデータ分析の指標が妥当かどうか、再検討する。

また平成30年度からは、前年度の予備的調査を踏まえて、近代インド諸語の一次文献を収集する作業を加速させる。収集対象には、言語別に優先順位を設けることとする。すなわち、とくにペルシア語文語文化との濃厚な関係のもとに展開し、比較的多数の文献を有するヒンディー語（現代のヒンディー語の古形としてのヒンドゥースターニー語のみならず、ダクニー語、ウルドゥー語もこれに含める）、ベンガーリー語の資料を優先的に収集・調査する。これらの資料の収集・調査が適切に進展しない場合などには、必要に応じてパンジャービー語、グジャラーティー語、ラージャスターニー語も調査対象に加えて、ペルシア語文献から得られる情報に对照させるべき近代インド諸語文献の情報に著しい不足が生じないように、補完することとする。

また所要の一次資料、二次資料を継続して整備するとともに〔設備備品費〕、購入できないものについては複写を入手する〔その他〕。また未公開の手写本資料についての調査も継続して実施すべく、平成30年度および平成32年度はインドの研究機関に赴くこととする。目下のところ、それぞれダクニー語使用地域であるハイデラーバード（サーラル・ジャング博物館、アーンドラ・プラデーシュ州立東洋写本図書館等）、ベンガーリー語使用地域であるコルカタ（アジア協会図書館）への調査を予定しているが、関連資料の収集や調査の進捗に鑑みて、デリーないしムンバイに調査先を変更する可能性も視野において、機動的に準備を進めることとする〔外国旅費〕。いずれの調査先においても所要の資料については、マイクロフィルム等の複写を購入する〔その他〕。また平成31年度にはロンドンに赴き、ペルシア語文献、近代インド諸語文献の調査・収集を進める。前年度のインド調査において入手できなかった研究資料がある場合は、この機会に補完する〔外国旅費、その他〕。

未公開の資料については、欧州の研究機関等に所蔵される写本資料のマイクロフィルムないしスキャンイメージをオフサイトで購入するなどして整備する〔その他〕。購入したマイクロフィルムはデジタルスキャンによって電算化し、研究に供する〔その他〕。さらに紙媒体の文献を高速にスキャンして、研究資料としての利便性の高い形式で利用するため、平成30年度に耐用限界の到来が見込まれる現有のフラットヘッドスキャナを更新して利用に供する〔設備備品費〕。大量の画像ファイルは、謝金を用いて処理・変換・整理を行わせる〔謝金〕。また所属先に整備できない文献を調査するため、東京大学東洋文化研究所（東京）に赴く必要が見込まれる〔国内旅費〕。

以上のごとく、ペルシア語文献群に加え、近代インド諸語の文献群についても、現有の研究資料と新たに整備する研究資料によって解読・整理・分析をすすめて、地方史の歴史叙述を構成する要素の情報を採集し、カード型データベースに情報を蓄積していく〔消耗品費〕。

以上の方法により、ペルシア語、近代インド諸語、両文献群の内容を对照させて、整理・分析することにより、近世南アジアにおける地方史叙述の形成と展開に関する総合的な基礎資料群を得る。そして両者の間にある関係性（ないし没関係性）を明らかにし、各地方の「ムスリム時代前史」を構成する諸要素の起源、類型、変化等の観点について、包括的検討に資する分析モデルを構築する。

#### 4. 研究成果

南アジアは地理環境や言語文化を異にする複数の地方から成っており、それぞれの地方が経験した歴史も異なっている。本研究課題では、これらの諸地方を統合したムガル帝国（1526-1858）のもとで著されたペルシア語の歴史書の数々において、各地方の歴史がいかに叙述されているかを網羅的に調査し、そのデータを収集・整理した。その特性と類型に関する分析は目下進行中であるが、帝国主導の歴史叙述が、南アジア各地方の過去を帝国の秩序に再編成していったプロセスを解明するための基礎的な資料群を整備することができた。

以下、年度ごとに研究成果を記す。

2017年度においては、ペルシア語の歴史文献を根拠資料として、各地方史に関する歴史叙述を整理する作業を進めた。調査対象は、インド通史の一部を構成するものから、単体として著作された地方歴史書に至るまで、網羅的に作業対象とした。一方、近代インド諸語文献については

初動の参考資料となるべきカタログ、参考書誌を整備した。さらにそれらから得られる知見をもとに、研究に資する個別の一次文献群を整備するため、整備すべき文献群について、検討を進めた。以上の一次史料群に加え、最新の研究動向をフォローするため、研究課題に直接、間接に関連する二次文献も併せて整備した。さらに、参照すべき未公開の資料については、マイクロフィルム等の複写をオフサイトで購入した。なお文献の実地調査の調査先として H29 年度には大英図書館を予定していたが、他の研究活動および校務が予期せず多量に上ったため、果たすことができなかったが、これについては H30 年度中に速やかに実施することとした。以上のごとく、本年度はおもにペルシア語文献群を中心として、現有の研究資料と新たに整備する研究資料を解読・整理・分析して、地方史の歴史叙述を構成する要素の情報を採集する作業を進めた。

2018 年度においては、前年度と同様、ペルシア語の歴史文献を根拠資料として、各地方史に関する歴史叙述を整理する作業を進めた。インド通史の一部を構成するものから、単体として著作された地方歴史書に至るまで、網羅的に調査対象とした。一方、近代インド諸語文献については前年度に収集した、初動の参考資料となるべきカタログ、参考書誌をもとに、研究に資する個別の一次文献群の検討を進め、その一部を収集した。さらに、以上の一次資料群に加え、最新の研究動向をフォローするため、研究課題に直接、間接に関連する二次資料も併せて整備した。また本研究課題に関連して、F. Speziale (パリ第 3 大学) を中心に始まった研究プロジェクト Perso-Indica の定期シンポジウムに招待され、ムガル帝国アクバル時代の歴史叙述について研究発表を行った。一方、南アジアにおけるペルシア語歴史叙述の資料を得るため、未公開のペルシア語写本を調査するため、コムおよびテヘラン(イラン)に赴いて、実施調査を行った。その結果、所要の写本の現物を閲覧し、調査先の協力を得て、複写資料を購入することもでき、その内容を整理、検討した。

2019 年度においては、前年度同様、ペルシア語の歴史文献を根拠資料として、各地方史に関する歴史叙述を整理する作業を進めた。インド通史の一部を構成するものから、単体として著作された地方歴史書に至るまで、網羅的に調査対象とした。一方、近代インド諸語文献については昨年度までに収集した、初動の参考資料となるべきカタログ、参考書誌をもとに、研究に資する個別の一次文献群の検討を進めた。さらに、以上の一次資料群に加え、最新の研究動向をフォローするため、研究課題に直接、間接に関連する二次資料も併せて整備した。以上のような文献相互の関係性についての関心から、ムガル帝国宮廷における典籍の翻訳をキリスト教典籍のペルシア語訳に即して検討した研究論文を公表した。またムガル帝国宮廷において行われた書物の書写や書道に関するペルシア語文献の訳注は、本研究課題にも密接な関係を持つ研究成果である。さらにそのような文化事業が行われた舞台である帝国宮廷の贈与儀礼を、国家制度史の観点から分析した研究論文も公表したが、これは本研究課題の時代背景を構築することに資するものでもある。

2020 年度においては、前年度までの成果を踏まえ、ペルシア語の歴史文献を根拠資料として、各地方史に関する歴史叙述を整理する作業を進めた。インド通史の一部を構成するものから、単体として著作された地方歴史書に至るまで、網羅的に調査対象とした。昨年度における研究の進捗が「やや遅れている」ことに鑑み、整備済みの資料の整理・分析、および欧州の研究機関に所蔵される関係資料を、マイクロフィルムやデジタル画像等の媒体によって整理・分析する作業を進めた。さらに地方史叙述の要素が流れ込んだ文献群として、16-17 世紀に現れたポルトガル語文献の重要性が明らかになってきたので、ポルトガル語の主要な編纂史料の基礎的な整理に着手した。一方、近代インド諸語文献については昨年度までに収集した、初動の参考資料となるべきカタログ、参考書誌をもとに、研究に資する個別の一次文献群の検討をさらに進めた。また最新の研究動向をフォローするため、研究課題に直接、間接に関連する二次資料も併せて整備した。以上のような文献相互の関係性についての関心から、ムガル帝国宮廷において行われた書物の挿絵に関するムガル帝国時代のペルシア語文献の訳注を作成し、公表した。

2021 年度においては、研究期間を延長した上で、昨年度までの研究の進捗と感染症の状況を踏まえて、ペルシア語の歴史文献を根拠資料として、各地方史に関する歴史叙述を整理する作業をさらに進めた。前年度までの作業の継続として、インド通史の一部を構成するものから、単体として著作された地方歴史書に至るまでを調査対象として、整備済みの資料の整理・分析、および欧州の研究機関に所蔵される関係資料を、マイクロフィルムやデジタル画像等の媒体によって整理・分析する作業を進めた。インドの研究機関に所蔵される研究資料を実地に調査する計画は、感染症のために実施することはできなかったが、上記のような整備済み資料の整理・分析によって、一定程度、その欠を補うことができた。一方、昨年度までの作業の結果、地方史叙述の要素が流れ込んだ文献群として、16-17 世紀に現れたポルトガル語文献の重要性が明らかになってきたので、ポルトガル語の主要な編纂史料の基礎的な整理をさらに進めるため、複数の史料の古版本の入力作業をアルバイトに行わせた。一方、近代インド諸語文献については昨年度までに収集した、初動の参考資料となるべきカタログ、参考書誌をもとに、研究に資する個別の一次文献群の検討をさらに進めた。また研究のとりまとめに資するべく、最新の研究動向をフォローするため、研究課題に直接、間接に関連する二次資料も併せて整備した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 真下裕之（監修）、二宮文子・真下裕之・和田郁子（訳注）	4. 巻 48
2. 論文標題 アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注(9)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紀要（神戸大学文学部）	6. 最初と最後の頁 107-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012690	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 真下裕之	4. 巻 -
2. 論文標題 ムガル帝国の形成と帝都ファトゥフブルの時代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岸本美緒編『歴史の転換期 6 1571年 銀の大流通と国家統合』	6. 最初と最後の頁 128-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 真下裕之	4. 巻 15
2. 論文標題 ムガル帝国宮廷における贈与儀礼とマンサブ制度	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メトロポリタン史学	6. 最初と最後の頁 49-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 真下裕之	4. 巻 -
2. 論文標題 帝国のなかの福音：ムガル帝国におけるベルシア語キリスト教典籍とその周辺	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 齋藤晃編『宣教と適応』	6. 最初と最後の頁 236-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二宮文子・真下裕之・和田郁子	4. 巻 47
2. 論文標題 アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (8)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紀要(神戸大学文学部)	6. 最初と最後の頁 81-128
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81012056	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真下裕之(監修)、二宮文子・真下裕之・和田郁子(訳注)	4. 巻 46
2. 論文標題 アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (7)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紀要(神戸大学文学部)	6. 最初と最後の頁 27-61
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真下裕之	4. 巻 -
2. 論文標題 建築物に込められたさまざまな物語の意味をたどってみよう: タージ・マハルの歴史と物語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐藤昇編『歴史の見方・考え方: 大学で学ぶ「考える歴史」』	6. 最初と最後の頁 118-131
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真下裕之(監修)、二宮文子・真下裕之・和田郁子(訳注)	4. 巻 45
2. 論文標題 「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (6)」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 紀要(神戸大学文学部)	6. 最初と最後の頁 1-44
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81010197	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真下裕之	4. 巻 86
2. 論文標題 クトゥブ・シャーヒー朝の起源に関する諸説とその周辺：インド洋西部海域における人的移動の諸相	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 112-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 真下裕之
2. 発表標題 ムガル帝国宮廷における贈与儀礼とマンサブ制度
3. 学会等名 メトロポリタン史学会 第15回大会 シンポジウム「世界史の中の武人 越境と帝国秩序」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroyuki Mashita
2. 発表標題 Contextualizing the so-called A'in-i Akbari in the Mughal historiography
3. 学会等名 The Sixth Perso-Indica Conference "The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: the A'in-i Akbari" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 インド文化事典編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 806
3. 書名 インド文化事典	

〔産業財産権〕



〔その他〕

神戸大学研究者紹介システム

<http://kuid.ofc.kobe-u.ac.jp/InfoSearch/Detail.do?dbid=1&recordnumber=dihN%2F0Xb%2FXn0%2BIBQ3mbe3w%3D%3D>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------